昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十九年　七月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

# 慈光

第三十六巻　第七号

（通第四二〇号）

## 目次

懺悔録（歎異抄講話）……近角常観……(1)
〝ただ念仏して〟たのもしさ……池山榮吉……(6)
内愚外賢……福島政雄……(11)
慈光日誌抄……西元宗助……(16)
無相師の御述懐より……岩崎成章……(21)
随感いろ〳〵……花田正夫……(24)

# 懺悔録

## （歎異抄講話）

近角常観

### 第一章　緒言

歎異抄は、親鸞聖人の信仰の御話を、まのあたり聞いた人が、自分の耳の底に留まりてある響を、そのままに筆にあらわして、後の道を求める者のために、遺して置いて下されたもので、実に聖人の信仰を味わうについて、大切な書物であります。その味わうというは、講釈や理屈では一向価値の無いことである。凡そ説教を聞くにも、又聖教を読むにも、唯言葉を聞き理屈をならべて居ると、何を聞いても何を読んでも、唯そのことと聞き流して仕舞って、我精神には少しも役に立たぬ。必ずこれを内心に省み、自分の身の上に照らして味わって行かねばならぬ。抑宗教は実験である。釈尊を初めとして各宗の祖師達、自分自身の内心の経験より、此人生の意義、即ち日暮しの上についての真の味を証得て、その実験のありのままを説き教えられたものであるから、残し置かれた所の経論聖教を拝読するにも、一々自分の身の上に引きあてて、深く味わうべきは勿論である。決して道理や議論で終ってはならぬ。然るに年月を経るに従って、段々と形式に流れて、大いに生気を失うようになる。丁度清らかな水の滾々と流れて居る川の上を落葉がおおい隠したり、泥土や砂礫が川の底にたまって、遂にその流をとめるようなもので、何れの宗派も、後代に至れば清らかな信仰の泉が涸渇して、唯形ばかりになって仕舞う。その時再び偉人が出て来て、自分が人生問題に触れて種々に経験し、最後に仏陀の光明に遇うて、初めて解決がついて、生き〳〵と胸中に感じ来って、信仰の泉が湧き出したのが、新しい宗派の源である。一宗の祖師というは、即ちこの泉を見出した人である。一つの宗派が出来たからとて、別のものが出来たのではない。久しき以前よりの仏陀慈愛の清泉を、新たに心中に味わうた結果である。

親鸞聖人は、釈尊以後多くの宗旨の祖師達の中でも、特に要領を得て、而も誰にでも味わえる、まことに人生に適



切な、微妙な信仰を有して居られた。凡そ高尚な人には高尚な経験があり、学者には学者だけの経験がある。人々各々それぞれの経験があるが、すべての人の誰にでも通じてよく解るのが、親鸞聖人の経験である。私は京都の本願寺に参詣して、満堂の群衆の中にまじって、聖人の御真影を拝する毎に、厨子の御扉が開くや否や、高いも卑しいも、富めるも貧しきも、老若男女、皆一斉に感涙にむせんで禮拝するのを見て、聖人の人格に、甚深の味のあることを感ぜずには居られない。聖人の御教化が、たしかに人間の急所要点を握って居るのでなくては、どうしてもああいう訳に行くものではない。かの琴の絃の一ヶ処を叩くと、他の絃が皆一斉に響きわたると同様に、学問智識の有無にかかわらず、男女貴賤の区別なく、いやしくも人間ならば、この人生の最要点たる或る一点を叩かれると、万人が万人みな一斉に、胸の中に微妙に響きわたる信仰である。其最大要点というは他ではない。此人生の物事が思うにまかせぬにつけ、及び我が身の罪のいかにも深重たるに驚き悲しんで、人生に於て何一つたよるべき点なきに至れる時、大慈大悲の御仏の心は、あだかも此の如き吾人を攝取して捨て給わぬという一事である。聖人の此御教化を聞いては、何人も心底に感銘せずには居られぬ。この一点を仰えてまします方は親鸞聖人である。仏滅後三千年来、比類なき唯一人の御方であると、私は断言するに憚からぬのであります。

此の如き聖人の実験を、心易く書きあらわしたのが此歎異抄であるから、此抄を講ずるというても、これを高尚の道理の上から論ずるのではない、唯聖人の信仰の結晶としてこれを味わうのである。恰も砂糖の塊を嘗め味わうように、私自身がこれを味わわして貰うて喜ぶのであります。而して諸君がこれを聞いて同情同感して下さるならば、それが即ち諸君の心に仏陀の慈悲の味があじわゝれたのである。

かく信仰は仏の心が直接に諸君や我々の心に触れて下さった事実であるゆえに、議論や理屈の間接なる手段では、到底味わうことが出来ぬ。直に仏陀と接する直接の実験によりてのみ味わゝれるものである。此歎異抄の如きは此見地に立って拝読しなければ、恐くは一言一句も了解することが出来ぬであろう。併しもし一たび此実験に触れた以上は、恰も琴の糸が共鳴するような塩梅に、一言一句みなハイ〳〵とうなずいて拝読することが出来る。故にこの聖教の文句を逐うて拝読する前に此抄に現われた信仰の実験における極要点と思われる眼目を取り出して、各項に就て実験の見地より出来る限り申し述べて、聖人の信仰の何物たるやを味わい、そして心中に湧き出てくる嘆詠の言葉をつらねて讃嘆したいと思います。

## 第二章　罪悪と救済

古来此歎異抄は、聖人の信仰の極処を説破したものとして、名高い聖教であることは誰も知るところであるが、特に近来新しき青年求道者の手に渡って、一種清新なる光輝を発揮しつゝある聖教である。全体本抄は、其文字が頗る直截簡明にして、人の肺腑を穿つが如き力あるが如く、またその内容が頗る極端に信仰の力をあらわして居る。その云いようの、如何にも思い切って云い放つたる点は、初めてこれを拝読した人は、何人も一驚を喫するであろう。而も最も何人も眼に着くのは、悪人救済と云うことを、如何にも大胆に断言してある点である。蓋しこれは、本抄の特徴の第一に数えねばならぬ点であろう。蓮如上人が、殊更に奥書して「無宿善の機に於ては、左右なくこれを許すべからざるものなり」と云われたのも、此点と思われる。昔より子供に剃刀を持たすようなものであると云い伝える聖教である。さりながら、かくの如く危険の断崖に迫ってあるだけ、それだけこの聖教は、生きるか死ぬかのセッパ詰まった時の救済である。平素ボンヤリして居るものの眼にこそ、頗る危険であるが、最後まで切り詰めた求道者には、此聖教でなくては救済の手はとどかぬ。

苟も本抄を拝読する人ならば、如何にも極端に悪人の救済ということを主張してあることに、気のつかぬ人は一人もあるまい。しかし真実この悪人の救済ということが、他人のことでなく自分のことであると、内心に感ずることは、頗る難いのである。抑々かく極端に悪人の救済ということを云わねばならぬ理由は、自分が極端なる悪人であるということを自覚したからである。自分が悪人であると自覚もせぬのに、悪人の救済などは、少くとも自分には不必要なことである。換言すれば、此歎異抄が、真実自分の生命になり、光明となって下さるには、先ず極端なる罪悪観に陥つた者でなければならぬ、ということである。成程本抄には悪人の救済ということが極端に書いてあるが、世人が其救済の説き方が極端であることにのみ着眼して、其罪悪それ自身が極端であるが故に、救済が此の如く極端に云いあらわしてあるのである、と云うことに気が付かぬ。もっと丁寧に云えば、悪人の救済ということを極端に云ってあるということは、先ず第一番に、我々の罪悪が極端に達しているということである。既にかく極端に達してあることに気がついて、到底自ら救うに由なく、絶対絶命であるという場合に、仏はまた極端な慈愛を以て、それを救い給う、ということである。世人が本抄を拝読して誤解し易い点は、この極端な罪悪観も起さずして、直にその極端な救済を目に着けるからである。甚だ意地の悪い云い方であるが、之を穿って云えば、自分は左程の悪人ではない。然るに仏は



極端な人間を救いたまうと聞いて見れば、まだ〳〵もっと悪をしてもよいと、いうような気持でいるのである。それゆえ本抄を読んで、悪はしてもよいのじゃなどいう誤解が出来るのである。真実自分自身で、極悪深重煩悩熾盛のものと自覚出来たならば、そのうえに、悪はしてもよいのであるなどと、云う余地がある筈がない。どうしてなりとこの苦悩を遁れたい、助けて貰いたいの考より外は無い筈である。此の如く万尋の断崖に臨んで居る吾人に対して、本抄は極端な救済の力を現わして下さるのである。また本抄が他人のために危険である、道徳を破ってもよいと勧めるかのように心配する人もあるが、それは無用の心配である。そも〳〵宗教は、自分自身のことであって、自分に対して救済されるか否や、と云うことこそ真の問題で、人のためにどうである。こうであるなどと云っているのは、いらざる無駄言である、こんなことを言う人の心持は必ずこういうことであろう。自分は左程の悪人でもないが、若し他の悪人がこれを見たり、又それで悪をしたりしてはいけない、という心配であろう。よく〳〵自分の心を押えて見れば解るが、他人は兎も角、我々は此の如く極端な救済を云うて貰わねば、自分自身の心が安まらぬのではないか。他人に対して、道徳上有害無害の穿索などをして居る余地のあるようなことでは、まだこの抄の価値は解らぬのであろう。

なおもっと甚しく云えば、此の如き人の心持は、自分は左程悪人でない故に、この書物はいらぬが、他の悪人がこれを読むと、もしや平気で悪い事をするのでなかろうかといういらざる心配である。なお一歩進めて云えば、何人も極端な罪悪観の起らぬ人にはこの聖教は無効である。極端なる罪悪観の起らぬ人には、危険でありや否やというまでの効力は無いのである。譬えて云えば、ここに火薬がありても、未だ発火点に達するだけの温度がないならば、少しも危険ではない如くで、極端なる罪悪観の点火なきときは、本抄は決して爆発せぬのである。故に本抄の中には、実に偉大なる力は籠っているが、罪悪観の火の無い人間には、砂も土も同様である。故に本抄を読んだために、人は道徳を破るなどという危険は毛頭あるべき筈はない。もし本抄を読んで、歎異鈔にこう書いてあるからとて、平気で道徳を破る者があれば、それは本抄で道徳を破るのではなくて、本抄はなくても充分に道徳を破る者である。むしろ道徳を破る口実に、本抄を用いたというもので、実際上から云えば、本抄の有無は、其人の道徳を破るということに、何の関係も無いのである。

之を要するに、本抄の第一の特徴である、極端に救済を説いてあるということは、詳に云えば極端なる罪悪観に対して、極端なる救済の光明が説いてあるということである。

即ち聖人が、極悪最下の機のために、極善最上の法を説くと云われたところである。

さてこの極端なる罪悪観に対して、極端なる救済の光明を味わいたることは、実際体験の事実によって、お話しなければ、到底諸君のお心に感じていただくことは、出来ぬことと考える。それゆえに私は、私自身が極端なる罪悪観に陥って、救済の至極をいただいた実験をのべ、又他の人が、極端な罪悪観に陥った時に、私の経験を聞いて、同じく救済の至極をいただかれたお話を致し、なおさかのぼって仏在世の時に、彌陀の本願をいただいた最初の人は、また恰も我々同様の実験を経て、初めて救済を得られた事実をのべ、結局親鸞聖人は、古今東西の動かすべからざる、仏陀の大なる力を、自ら体験して、これを歎異抄の上に示されたことを、お話しようと思う。

## 御名の岸辺

木村　無相

波がヒタヒタ
うちよせる
かわいた岸に
うちよせる
かわいた砂に
うちよせる

み名がヒタヒタ
うちよせる
かわいた心に
うちよせる
かわいた胸に
うちよせる

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ



# 〃ただ念仏して〃 たのもしさ

池山　榮吉

今度書きましたのは、〃ただ念仏して〃と題してあります。顕道会館でお話した主な部分は〃ただ念仏〃と題して、パンフレットになっていますから、皆様のお手許にとどいているだろうと思います、それとは違うのです。前のはただ念仏、今度のはただ念仏してとあるのです。けれども余りに紛れ易い嫌いがありますから、〃ただ念仏して〃の方は、たのもしさと題を改めてもよいのです。

で、今日の御話はこの二つを合わせて、〃ただ念仏して〃——たのもしさと題しようと思うのです。本文を読みながら、合間々々に、二三感想をさしはさんで行って見ようと思います。

それからもう一つお断りしておかなければならないことは、もとこの本文は〃ただ念仏して〃と題してありますから、念仏が話題の中心になって居ります。頂目が改まるに従って、或は念仏はとか、或は念仏をと云った風に、多くは念仏に直接関連して、話が進められて居ます。だから私の言うことは、なんでもかんでも念仏々々で、徹頭徹尾念仏づくめだ、と、こう思われる方もあるかも知れませんが——またそれで一向差支えはありませんが、ただ一つ念のため一言して置きたいことは、私のいう念仏は、いつでも、どこでも、一寸した工作を加えさえすると、直ぐ信心と置き換えることが出来る、そうした念仏であり、信心であります。この点は篤と御注意を願っておきます。

〃ただ念仏して〃という言葉は、聖人の、よき人のおおせに聞いたきわみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすすめるおくのでもある。

親鸞聖人が、よき人、法然上人から、直々承られた極致、聖人御自身の信仰の告白の肝要、また御自身の信仰を、人に説き聞かせようとするときの最後の切札、いずれもその現われる方面こそ違いますが、ものは一つなんです。〃ただ

念仏して〃という、それだけなんです。

〃ただ念仏して〃の出処はよく御存じでしょう。私のいつもよく引合に出すあの歎異抄第二章〃親鸞におきてはただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり〃あれですな。あのお言葉は、師の仰せの骨子ですね、同時にまた思い切りきりつめた信仰の告白ですね。じゃその信仰を、人に伝えるにはどうしたらいいか、というと矢張りそのまま、その通り言うのに越したことはない。それは真先に店頭に飾るべき標本であり、また良買の深く蔵するとつときでもあるのです。〃私はただ念仏して、弥陀にたすけられなさいと、先生のおっしゃったのを信じているだけなんですよ〃こう人に對って言う、それがそのまま、我が信仰を人に伝えたいと、満腔の誠意をこめて仰しやる御言葉、教人信の最後の通牒である、ということは、同章の最後に、〃詮ずるところ、愚身が信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなり〃とあるのに徴しても解りましょう。

この言葉を、信への手引として受入れたひとは、かずかぎりもないことであろう、私などもその一人である。この言葉に引込まれて、じゃ私もと、急に真似る気になって、断然声に出したのが、あこがれの信界への踏切であった。

これは、私がはじめて〃ただ念仏〃する気になった刹那の経過です。この〃ただ念仏して〃という言葉を手引にするのです。盲人が目あきに手を引かれて歩くように、この言葉を手引に、念仏を、信仰を、受入れた人は、親鸞聖人を先達として、今日までにどの位の数にのぼるか、とても想像も及ばないであろうし、また将来どこまで行くことやら、ただ無数無限という外はあるまい。

私なんども矢張りその一人なんです。或る時、信仰というものが欲しくて、欲しくてたまらなかった時です、ただ念仏してという言葉が、不図胸に浮んだのです。ああ聖人はそうされたのか。〃じゃ私も〃これが私の入信の合言葉です。親鸞聖人もそうなんだ、じゃ私も、南無……

私は本来念仏が出にくかった性、なか〳〵念仏が出なかったので、ひそかに弱っていたのです。信仰はあると思っているが、念仏が伴わないのは変だな、と思っていたのです。それがあの御言葉が胸に浮かんだとき、じゃ私もと、



思い切って断然声に出した。断然、南無と云いかかった途端です、まだ阿弥陀仏と言いきらないうちに、腹のどん底から盛り上ってくる衝動、破壊と建設と一緒くたに、ごったかえす混沌の中から、朗々と声に出る念仏、高らかに、とめどなく、やがてふと気がついて、我と我が心をみつめて、あ！これが信仰かと、うなずいたことを覚えている。

つまり咽喉もとにとどこおる念仏を、思い切って声に出したのが、あこがれの信界、信仰の世界への踏切となったので、これも私のよく言うことですが、信界への転向には、踏切とか飛込みとかいうべき、思い切りが肝要だと思います。どうせ信仰の世界は、普通の感覚、感情、論理等の世界とは違って、合理一方の標準で割り切れるものではないのですから、まあいい加減なところで、というのが余り無造作に聞こえるなら、大凡見当のついたところで、一躍、飛込みを断行するより仕方がありません。どんな風にして？〃じゃ俺も〃の掛声で！親鸞聖人が〃ただ念仏して〃と言っていられるのだから、よし、じゃ俺も真似しよう、南無……。これも——無論こればかしではない、他にもだん〳〵あろうが——飛込の骨の一つだと思います。

今日我が国では、津々浦々にいたるまで、念仏の声の響き渡っていないところはない、日本人にして、この声を或は口にし、或は耳にした覚えのないものは、幼児を除いては一人もあるまい。さすが大乗相応の日域、こうあるのに不思議はないが、他面、宇宙一切の事物は、その涯しなき流転の相のうちに、鐘の音をさえ諸行無常とひびかせて、遠く近く裏に表に、人生の最大緊急の問題、ただまことなる念仏への関心をそそらないものはない。

念仏の響が、普く海内に行きわたっていることは、まことに驚くべきものがある。山間僻地に至るまでと云ってもよし、或はまた逆に、大都市の繁華の中枢に至るまでもと云ってもよい、いたりいたらぬ隈はないのである。若し或る人間が、日本人であるかないかを知る必要であるとしたら、先ず第一に、念仏を知っているか、どうかを試してみるがよい。知らなかったら疑いもなく、日本人ではない。

幼児にだって、念仏というものの存在を知らせる機会は多々ある。まだろくに舌もまわらぬ子供にさえ、お月さんに向っては、ののさんなんまんだぶとお辞儀をさせるなどは、浄土教系の家庭には珍らしくもないことであり、その外にこれに似たような偶発的、若しくは計画的機縁が随処に見られる。現に私なども、大方四つか五つ位の頃であったろう。近所のあちこちに、百万遍という催しがあって、よ

く友達と一緒にでかけたものである。其処には仏壇の飾ってある間に、十人二十人の子供をぐるりと丸く坐らせて、その内側に畳六畳ほどもあろうかと思われる、大きな珠数が展げてある。子供は両手にその珠数を握って、膝のあたりまで持って来て、誰だか一人大人の人が、ナムアミダブツと称える音頭につれて、異口同音にナムアミダブツと叫んで、順繰りに殊数を操る。それを何遍となく繰返して、やや厭き気味になった時分に一と休みする。すると御褒美としてお茶が出る、お菓子が出る。それで元気が出ると、またはじめる、といった調子。西も東もわからない頑是ない子供を、こうして念仏になじませようとする仕組。私のでくわしたのは東京だったが、外の土地にもままあることらしい。おかげで私もまた幼年時代の昔、力一杯声をはりあげて、無我夢中で念仏する経験を、早くも済ましていたのであった。

日域大乗相応地とあるからは、普く念仏が行き渡るよう、或は遠大に、或は卑近に、いろいろな方法手段の講じられるのも怪しむに足らないが、宇宙全体の現象も、自然のそれにもせよ、人事のそれにもせよ、或る意味に於て、皆悉く念仏への示唆を含んでる、と見られるから妙である。万物は流転する。一切は澱に浮ぶうたかた、かつ消えかつ結んでしばらくもやまない。二六時中地震と津浪に見舞われているような人生。そこには必然的に不安と焦燥が巣くう。だからその対照の安心と落着、無常輪廻の支配する現実に対して、その反対概念、常住にして変易なきものへの要望がおこるのは、蓋し自然である。そしてその要望をみたすべく、自ら進んで約束するのが念仏である。聖人の言葉をかりて言えば、〃煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞ、まことにておわします、で、独り念仏のみこそ、主観的にも客観的にも、罪悪業報の重圧にもめげぬ、末通りたる無碍の一道、金輪際ゆるぎなき、唯一恒常の立脚点である。

考えて見れば、人生はこれほど緊急な問題はない。だが、と私は性急に、手取早く結論する。凡そ世間一切の事物は、それみずから知ろうが知るまいが、流転の姿そのままをしるべとして、来世の悟の前の縁を、結ぼうとする傾向にあると。

こうした見方の一例として、近頃の流行歌を一つ紹介して見よう。それは青い芒と題する歌謡曲で、作者はもとより私の云うような宗教的意味を含めて詠んだのではないが、私が勝手に、それを一つの譬喩と見て、宗教的色彩を加味



してみると、また一種別様の感興が湧いてくる。その歌の初の一節はこうである。

青い芒の野にくれば
風に吹かれて立つ波の
波のゆくえの遠いこと

私はこの歌を聞くたびに、まだ生れて来ないさきから、今日の今まで、綿々として絶えない業、必然の因縁が、更に未来永劫に向って、展開してゆく光景が思い浮かぶ。続いて二節三節にこうある。

遠い思いの野をゆけば
宵をほのかに出る月の
月のすがたの細いこと

細い出月の芒野に
まちもまたれもせぬ身ゆえ
素足しろ〳〵一人泣く

思いを遠く来し方、行く末に走せながら、素足しろ〳〵歩みを運んで行くと、心にさま〳〵な空想がうかんでくる。が、その淡さ、はかなさを象徴してか、今出る月の姿の細さ。孤影悄然、せきあえぬ涙といった趣。

全体からうける印象として、吹きすさぶ業の嵐に、涯しない波とさわだつ芒野を、とぼ〳〵辿る一人法師の淋しさが目に見えるではないか。ここもまた二河白道の一地点、語るに友なき、無人空曠の沢である。

こうした場面は、人生いたるところ、渚の貝殻のように散らばっていて、手当り次第、採るにまかせてある。

『仏と人』より続く

---

**池山先生の遺詠**

たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ

よき人のおほせにききて御名をよべばよばはせたまふ御声きこえぬ

われならぬ清らのわれのわれにありて穢悪のわれをわれにしらしむ

久遠このかた子ゆゑの廻向わたし一人をかたおもひ

# 内愚外賢

## 一、賢善精進

「内愚外賢」の題にして頂きます。これは親鸞聖人にお親しみの方々はよく御存じでありましょう、聖人が八十三才の八月にお書きになりました愚禿抄の一番初めにありますお言葉であります。それは「賢者の信を聞きて、愚禿が心を顕はす。賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり」とあります。

私自身も、二十六才の夏から親鸞聖人のみ教を頂くようになりましたので、もう若い頃からこのお言葉が、心にしみ込んでおります。ところがこのお言葉の味わいということになりますと、なか〳〵でありまして、私は御覧の通りの老境に入りましても、その味わいを十分に尽すということは、なか〳〵できないのであります。聖人の教行信証の信の巻を拝見いたしますと、善導大師のお言葉をお引きになっておりますところによれば、もと〳〵善導大師は外に賢善精進の相を現じて、内には虚仮を懐くことを得ざれ、

福島政雄

というようなお心持だったということでありますが、それを聖人がお読み替えになりまして、いまのようにお読みになった。そこで善導大師のお言葉の通りでありますと、これは一種の導徳的の教訓のように聞こえるのであります。外には如何にも賢そうな善人であるような相を現わしていながら、心の内には嘘偽りばっかり、煩悩ばかりの有様であるということはよろしくないと、こういう風に伺いますというと、どうもそれは道徳的の教訓のようにも感じるのであります。ところが聖人のお読み方によりますとそれは宗教的自覚のお言葉であると、承わりますのであります。

我々は外面は如何にも賢こそうな、善人であるような、一筋にまことの道に進んでいるような相を現わす資格のあるものじゃない。自分の内を省みると、すっかり虚仮、嘘偽り、煩悩だらけの自分である。こういうふうのことになりますから、これは宗教的自覚のお言葉である。このように承っております。

ところがこれを私も長い間くりかえし頂いておりまして、そのように読み変えて頂いて、私自身の胸にどういうことになるか、これが問題なのであります。外に賢善精進の相を現わせるような、資格のある自分じゃない。なるほどそれはわかります。内に虚仮を懐けばなり、これもわかります。ところが問題はこういうところにあるのでありまして、私自身が外に賢善精進の相を現わしていないか。現わす資格のないものならば、愚者は愚者のように、愚かな人間は愚かな人間のような、そういう相を現わしているのか。こういう問題になりますと、どうもそうでない。矢張り自分は外に賢善精進の相を現わしているんじゃないか、こういうことが思われるのであります。と申しますのは、よく私を批判して下さる方が、なんだか如何にも立派そうな人間に見える。いわば聖人のように見えている、そういうことを仰っしゃる方が、時々あるのです。もっともそれは私に対して、お世辞を言って下さるのであるということであれば、それまでありますが、ほんとうに私を、如何にも賢善精進の人間である、こうお思いになってそう仰っしゃるならば、それは私自身が、やっぱり賢こそうな、聖人ぶった、如何にも真面目に、一筋に進んでいるような、そういう相をどうも外に現わしているじゃないか、こういう問題になるのであります。

そして自分の実際になりますというと、聖人の仰っしゃる通りに、内に虚仮を懐くのであります。内には煩悩だらけなのであります。若い二十台の煩悩の有様と、もう七十を越えました煩悩の有様と、趣きが少し違うということはありますが、この煩悩というものは、なか〳〵老年まで続くのでありまして、老年になりますと、この煩悩の細かな先の先、枝の先の先まで、自分に感ぜられるのであります。もっとも、一方から申しますと、老人になると鉄面皮になる。若い時は非常に恥ずかしく思ったことを、老人になると、ナーニこんなことは人間として当然というような感じを起こしまして、鉄面皮になってくるというような一面は確かにありますが、一面では若い時には感じなかったところに、自分の如何にも情ない相というものを感じて参るのであります。親に対する自分の態度、心持ち、というようなことでありまして、私の若い頃には、それでもまだ多少は親孝行をしていたと思っていたのが、只今になって考えてみますと、みんな嘘だ、親不孝ばかり続けてきたのである。親孝行と思っていたのが、大きな自分びいきであって、誤まりであったというようなことをひし〳〵と感じますことが、いろ〳〵あります。そうですから、老人になると、ただ鉄面皮になるというのでもないようであります。鉄面皮な一

面がないのではありませんけれど、一面において細かな反省があります。細かく自分の今までの一生を振り返ってみまして、そしてなるほど自分は、この点においても駄目であったナ、ひとかど自分はいいつもりでいたのが、そうじゃなかったナ、というようなことを感じて参ります。そういたしますというと、今の親鸞聖人のお言葉では、愚禿抄のお言葉の方が、いっそうに私に適切である、というふうに感じて参るのであります。

## 二、法然上人

一体、賢者の信を聞きて、という、賢者のシンの字は、御承知の通り、信仰の信の字をお書きになっております。それから愚禿が心のシンの方は、心の字をお書きになっております。そうして、この賢者というのは、直接には法然上人と、こう考えていいようであります。法然上人のご信仰を聞かせて頂いて、愚禿親鸞の心を顕わすという、法然上人の御信仰は、内には非常に立派なものを抱いておられて、外には愚かなような相をしておいでになる。ところが、愚禿親鸞はその反対で、内は愚かなくせに、外には如何にも賢人、善人ぶっておる、というようなことになるかと思うのであります。そこで私はよくこの法然上人と親鸞聖人ということを考えるのでありますが、私が若い学生時代に、村上専精先生から、日本仏教史の御講義を聞きましたのであります。その御講義の中、村上先生は、法然上人は、日本仏教史上の高僧方のうちでは、一番円満なお方であると仰っしゃったことが私の記憶にハッキリと残っております。ところがその円満な法然上人というのは、その後上人関係のものをいろいろ読みまして、考えてみますと、やっぱりそれは四十三才以後の法然上人のお姿である。上人と雖も一番初めから慈悲円満という方でなかったようであります。九つの時に父上の漆間時国が源内武者定明に攻められて夜討ちに遭うて、深手を負うて亡くなられる。その時の勢至丸といわれた後の法然上人は、勇気凜々であった。弓に矢をつがえて、定明の眉間を目がけて矢を放ち、それが当って血が出て目に入るというので、定明はこれはたまらぬと、引き揚げたほどでありますから、なか〳〵勇気のある、強いところのある少年であったと思われます。

それから父君の御遺言に従って、仇討ちを思いとまって、近所のお寺で出家なさいました。その寺の観賞という和尚さんが、この新しく弟子入りをした小僧は、非常に利発で、なんでもすぐ覚える。これは京都で勉学させたいというので、叡山の源光に手紙を托されたのであります。それを受取って見ると、文殊菩薩の像一体を差し上げると書いてある。そこでその小僧の目を見ると、なんともいえない利発の目である。文殊菩薩とはこの小僧に相違ないと思い、弟



子として修行させられた。これから見ますと、非常に聡明なことが、自ら目に現われていたのであります。だから勇気はあり、強くはあり、非常に聡明な質で、長い間叡山で修行されて、最後にお心持が開けましたのが四十三才で、例の善導大師のお言葉、一心専念彌陀名号云々とあるあのお言葉で心が開けられ、それ以後の法然上人こそ、本当に慈悲円満の上人におなりになったと思うのであります。

そして源平の戦いがすみました後では、源氏の方の有名な武士も上人のお弟子になり、熊谷蓮生坊などがそうであります。それから平家の落人も、上人のお弟子になるというようなことになり、敵も味方もなく、一つの道、信心の道において融け合っていくとなったのであります。

その法然上人が、十悪の法然坊、愚痴の法然坊と仰しゃったのであります。その当時の法然上人を知っている人々は、智慧第一の法然坊と、非常に尊みあがめておりましたが、上人御自身の心持ちでは、十悪、愚痴の法然坊であります。そこで私、こういうことを感じます。上人は、その元来の御性質が聡明な方であって、ひとたび彌陀の誓願不思議、その不思議にお遭いになって、そのお心持ちが徹して開けて来ますと、極く素直に自分の煩悩熾盛ということに目をおさましになって、実際自分はこの仏さまの光に照らされて見れば、確かに自分は十悪の法然坊というふうに素直に感じておいでになったと、私は感じております。

ところが親鸞聖人の場合はもう少し違う。聖人の元々の御性質というものは、どうも非常に鋭いものを持っておられたかと思うのであります。それは聖人の御肖像のうちで、一番真実を伝えられると云われる、あの鏡の御影というのであります。直々のお弟子が書き残したもの、本当の墨絵のスケッチ風のお姿でありますが、私は余程前に御本山で、それを拝まして頂きましたが、あの御肖像を見ておりますと、聖人の鋭さというものが、なんだか頬骨のあたりに感ぜられます。非常な鋭さと云いますか、意志の強さ、鋭さをいうものを感じますのであります。目を見ますと、実に慈愛の目というようでありますが、聖人という方は、非常な、元々鋭さを持った方であるのが、法然上人にお会いになって、彌陀の誓願不思議に助けられ参らせる身になられました。そうすると、御信仰は一つでありますけれども、御自身を見られる御自身の姿についての感じというものが、法然上人とは違う、こういうところを私は感じるのであります。

それは歎異抄の、善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや、あのお言葉で、悪人とは誰であるか、善人とは誰であるか。この問題を私長い間考えさせられておるのであります。すると、善人というのは親鸞聖人が、御自身のこ

とを仰っしゃる。悪人とは法然上人のことをお考えになっていると感じておりましたのであります。というのは、その場合の善人を御自身に当てておいでになるというのが、この愚禿抄と内愚外賢、これであります。成程この彌陀の誓願不思議に助けられ参らせて、煩悩具足の自分が救われ、決して素直に自分こそは、煩悩具足ばっかりの悪人であると、素直に自分がそうであると見ることのできない、やっぱり自分は、どこかにいいところがある、というような顔をしているのである。法然上人のように、素直に自分は煩悩具足の悪人であると目がさめておいでになる方は、もちろん往生を遂げ給うのである。自分のような、ひねくれて、煩悩具足と言いながら、やっぱり自分は善人であるかのような気持が、どこかにあって、どうも賢こそうな顔をしていると、外側には賢善精進というような、そういう心持ちがおのずと顔に現われている。こうして仕方のない奴でさえも、彌陀に助けられて往生を遂ぐるのである。法然上人のように素直に自分が十悪の法然坊と感じておいでになる方は、勿論救いに預かり給うのである。このように私はあそこを受取っているのであります。

いつか雑誌にそんなことを書きましたら、それは一寸ひねくれているんじゃないか、と御批判を受けました。けれども、そこが聖人の問題よりも、私自身の問題なのであります。私自身がどうしても、どこかが取り柄はある男だというような感じが、どこかに残っておるのであります。決して自分は何もかも取柄のない、それこそ煩悩具足の地獄のどん底に落ちる人間だ。パッと手を放してというようなふうじゃないのである。どこかにすがりつく、ここだけは自分を認めて貰いたいとこころがあります。であります からどうしてもそうなるのであります。すると私という人間は、愚禿抄の、内は愚にして外は賢なりという、この言葉によって、初めて自分というものが、そこに救われる道が開ける。そういう感じを持つのであります。

『親鸞聖人を仰いで』より

# 慈光日誌抄(一)

## ——医学と生死を結ぶもの——

西元宗助

Y県の医師会から、その総会において、現在の臨床医学—医療の問題点について、約一時間、話すよう依頼を受ける。かねて医療について少しく関心のあった私は、即座に引き受けると共に、わが川畑愛義博士（京大名誉教授）に教えを乞いました。

そして、わたしの理解しえたことは、最近の医療の著しい発達のため、日本人の寿命がのびて老人問題は深刻になり、また末期のガン患者も高カロリーの点滴輸液のため、以前にくらべて延命するようになった。しかしそのため、末期患者の病苦と死の不安は以前にもまして深まり、しかも所詮は確実に冷い医料器具にとりかこまれて死ぬ。それは却って残酷な場合さえもある。

このような事態になって、良心的な医師は医療の限界をつくづく痛感せざるをえなくなり、場合によっては医師も患者も肉親も、ひそかにユーサイネィジア（安死—安楽死）のことに想いが及ぶ。まことに事態は深刻といわねばならぬ。

なお、わが国の医療は、いちおう欧米に比べても高度の医療保険制に支えられ、患者家族の負担は相当軽減されている。しかし患者の看護附添いには深刻な問題のあること、それは一には戦後における家族制度の崩壊と核家族化の問題にもかかわっている。そういえば、現在、日本人は自宅ではなく、病院で殺風景な臨終を迎えることが多くなり、ここに心ある宗教的医師によって、末期患者のためのホームであるホスピスの問題が真剣に構想され提唱されるようになった。

ともあれ、医療制度の整備も福祉行政の拡充も大事には違いない。しかし今や、それにもまして、宗教を疎外してきた近代日本人は、あらためて、この人生を如何に生き、如何に死するかという「生死出ずべき道」を、真剣に考え求むべきときに来たのである。さいきんの仏教書ブームは、そのことを無言のうちに示している。また、げんにガンで

死去した精神科医・西川喜作氏は、その手記『輝けよ、わが命の日々』の中で「医学は死の不安に怯える患者を果たして救っているだろうか」と自問しつつ、最後に「宗教こそ、医学と死を結ぶものか」と述べていられる。私はこれに感動し示唆されて、「医学と生死を結ぶもの」という演題で、講演の構想をねることにした。

＊　＊

ところで、あらためて痛感させられたことがある。それは前記のホスピスのことを含めて、これらの問題に真摯に取り組んでいる病院にしても医師にしても、その多くがキリスト教関係であるということである。

そういえば、わが国の慣習では、寺院僧侶と、いえば多くの場合、葬式が連想されて、病院とは結びつかない。げんに僧侶が法衣のまゝ病院を訪れることは喜ばれないようである。これは看過しがたいことで、殊に日本人の多くが習俗的には広義の仏教徒といってもよい現実を顧みるとき、問題は重大である。

＊　＊

『死の瞬間』の著者キューブラ・ロス博士はいう。「ただ死を待つばかりの状況にある末期の患者にとって、いちばん必要なのは心を医してくれる聖職者である。じじつ末期の患者へのケア（心くばり）は聖職者の協力なしには不可能である」と。さらに、NHKの『宗教の時間』で、川畑博士（前出）とも対談の池見酉次郎博士（九州大学名誉教授）は、その編著『死の臨床』の中で、「医療は人のいのちに深くかかわる仕事であるだけに、医師には確固たる死生感の把持——すくなくとも人間実存との対決、（略）宗教への関心と教養が必要」と力説し、現に前記の編著の執筆陣は、池見教授を除いて、ほとんど凡てキリスト教関係の医師乃至医学者で占められ、このような医師にしてはじめて、聖職者との協力も可能であると示唆していられる。

そういえば、わたしの関知している限り、キリスト教系病院においては、病院と教会とが深く結びついている。例えば京都のバプテスト病院についていえば、病室には聖書がおいてあり、夕刻には聖歌が放送され、またミサへの案内もある。もちろん希望によっては神父もシスターも喜んで来室する。看護婦もよく訓練されていて、知人の仏教徒も病気のときはバプテストに入院するにかぎるという。

俗に「隣の家の花は美しい」という。以上のことも、あるいはその類であるかも知れぬが、しかし、すくなくとも仏教の各御本山も寺院も、そしてわれわれも、今までのようなことでは、仏教本来の精神に反することを省み、早急に病院へのアプローチ（接近）に着手しなければならぬのではあるまいか。



ともあれ、わが国の寺院、殊に在家仏教である浄土真宗は、今日、このような問題について、社会福祉事業のことも関連して、何か新しい手を打たねばならぬときにきていることは事実であろう。南無阿彌陀仏

＊　＊

この四月から一年間、全く思いがけなく、龍谷大学の真宗学の学生に、「歎異抄の諸問題」と題して、講義をさせていただくことになった。

最初の日・四月十七日（木）第三校時。さすがに緊張して大宮学舎の教室に入ってみれば、ギッシリといっぱい。座り切れないで立っている学生もいる。真宗学の院生、それに三回生と四回生の有志約六十名。

こんなに静かに真剣に聴講していただいたことは、この三十年間、一度もないと思うほどに寂か。

講義を終えたあと、思わず学生に最敬礼した。なにか知らん涙がでた。お念仏が出てくださった。極重の悪人、ただ仏を称すべしと。

## 慈光日誌抄（二）

### ——阿修羅の琴——

前記に「生死と医学を結ぶもの」と題して、小文を書かせていただいた。その拙稿を一覧された花田先生から、折返えし、アメリカの青山徹之開教使の手記『ある宗教カウンセラーの記録』（京都・文昌堂刊）をご存知かと、おたよりをいただく。じつは私も、青山さんの右の御著書のことを想い起こしていた。よって、ここにまず青山開教使の紹介をさせていただこう。

青山師は同書によると、富山県の出身。一九六六年（昭和四一）龍大大学院（信楽教授門下）修了後、渡米してアメリカ仏教団の関教使の傍ら、宗教カウンセラーとしての修業を、エール大学病院をはじめ地方病院にて積み、その間、ドビホール博士などの指導をうける。わたしは一九六六年、特請講師として渡米の際、お目にかかっている。

アメリカにおける宗教カウンセリングは、殆んどすべてキリスト教関係者によるもので、仏教殊に真宗の僧侶として、その技術を一応専門的に修得されたのは同師などをもって最初とするようである。それだけに『ある宗教カウンセラーの記録』は意味がある。同書の「あとがき」に、師は祖国日本の仏教界の人々に訴えていられるが、その要旨を、なるべくその文章のままに紹介してみよう。

「アメリカにおりながら、日本語のテレビも見ることが出来るようになった。昨夜、『いのち燃ゆる日々』が放映されていた。癌におかされた主人とその家族の悩みが映画

化され、私には特に関心深く見せていただいた。アメリカにおいては、どこの病院にも聖職者が、カウンセリングのできる人がおり、患者又は家族の悩みの相談相手になっているのに、日本では、いったい、どうなっているのだろう。日本の医学界は宗教家をどうみているのであろうか。宗教家はまた悩める患者のことを、どう思っておられるのであろうか。ただ葬式や法要に追いかけまわされる僧侶であっては、社会からとり残されていくであろう。云々」

この書の内容は、その目次の一端によってもうかがわれる。例えば『病院の緊急室』「先生、私は仏さまに嘘をつけない」『死の直前の会話』「先生、わたしの髪の毛が抜けます」（ガン患者）等。

なお、この書には、最近、わが国でも話題になっているホスピスのことが「ハスピスのこと」と題して紹介されている。そしてハスピス（ホスピス）とは「別に建物から出発しなくてはならないことはない。特別な建物施設がなくても、慈悲心をもった医師・看護婦そして聖職者（僧侶）等が、すこしの時間でもこれらの苦悩する末期患者の話し相手になってくださればよいのである」と。

＊　＊

ここまで書いて、先述のアメリカ仏教団BCAの殊招講師として各地仏教会を巡回させていただいた日々のことを想い出す。

アメリカの開教使はまことに忙しい。仏教会のメンバー（門信徒）が入院すると、当病院事務室から仏教会に電話連絡がある。それで開教使先生は、カーで病院に患者慰問にかけつける。わたしはそのようなことを何度か見聞して感激した。そのことを再確認するために、当時シャートル別院の名輪番でおありだった久間田顕了師が、現在、本山国際部嘱託でおありなので、電話してみると、久間田先生、お元気な声で、もちろん現在もそうであるとのこと。だいたい、アメリカの病院は入院患者があると、その患者の所属の宗派と教会（寺）名を申告させる習慣のあること。したがって仏教会としても、メンバーの入院するような病院とは日常からつとめて連絡を密にするよう心がけるとのことで、これはキリスト教社会のよき習俗によるもののようであるとのことであった。

さきの青山開教使の著書の「あとがき」の訴えの言葉を、もう一度、噛みしめてみる。そうして浅からざる悲しみをもって、これをしるす。

＊　＊

さる五月二十日（日）には、浄住寺の榊原徳草老師らのお伴をして、愛知県岡崎市郊外の杉浦氏邸での恒例の「一道会」に参席する。ご病弱のためとは申せ、花田先生のご



欠席は、やはり淋しいものがあった。

また五月二十七日（日）には、洛西・山ノ内の今田氏宅での足利浄円師二十五回忌、同夫人十七回忌のご法要に招かれる。会するもの桐溪順忍和上（数えで九十歳）をはじめ、井上善右ヱ門、石田充之、玉城康四郎、中井玄英等の諸兄と金子大栄師未亡人と私。そして足利・今田のご親族の方々。

東京からわざわざ西下参席なさった玉城兄の心情と心境には深く心うたれるものがありました。また浄円先生のご恩を想うては、まことに切なく、「阿修羅の琴の鼓するものなしと雖も、音曲自然なるがごとし」とは、本願力を現わし、南無阿彌陀仏を意味する浄土論註のお言葉で、浄円先生の最も尊ばれた句であるが、師のご生涯は、まさにかくのごとくにあられた。この日、帰宅して瞑目静坐。

＊　＊　＊

榎本榮一さんの四冊目の詩集「念仏のうた光明土」（樹心社刊・二千円）が刊行された。珠玉のような詩が、いっぱいちらばっている。その中の一部を左に紹介させていただく。惜しみ、惜しみ。

### 虫の念仏

一ぴきの虫が
地べたで
自分のいのちに
手を合わせ
ナムナムいっていた

### 求道

もてあます煩悩も
照らされつつ
逃げず　追わなければ
わが影と気づき
いつか旅の伴侶となり

註　あとは二十三頁下段に続く

# 無相帰の御述懐より

岩崎成章

無相師の御便りに、雨が降っても雪が降っても、毎月遠くからお越し下さっての御法談まことに有難く、私自身がそのため大変教えられ、育てられることでして、特に語録を御喜びにて、語録育ち、歎異抄育ちといってよい私には、どんなにありがたくカケガエのない唯一人の法談相手でして、まことに有難く存じております。

語録に、伊賀三左ヱ門の〝破れ三業をハナにかける〟とあり、〝みなよいと思うは自力なり。他力の人は我が身はどうしても地獄行きより外に思われぬのが、信者の平生の心得也〟とあるのは、御廻向の信心は「照らすもの」として、我々の内面、自性の地獄行き無仏法を照らして、破れ三業は生死出離にはツユチリほども役に立たぬことを知らせたまうことをさすがまれなる信者の三左ヱ門は御承知にてのおことばと思います。

又、「余程の信者でないと地獄へ堕ちきれんげな」のお言葉、全くその通りと存じます。皆「地獄ゆき〳〵」とよく言ったり書いたりしていられるが、ホントに地獄ゆき、無仏法の外道と、照らされきっていられる方は実にマレであると思われることで、今の話したり書いたりしていられるイワユル先生がたのうち、果して地獄ゆきの自性を照らし出されている方が幾人居られようかと思うことです。

その点お互は、古人の僧俗の地獄ゆきの本性をハッキリと照らし出されていられる「語録」のごえんにあわさせて頂けてまことにシアワセと思うことです。照らしたまう法（信心）によって照らされて明らかになったのが「一個の人格者」などと云えるカツコよいものではなくて「余りにも根が深い無明煩悩の身であり、どうにもならない宿業の身である」と云う「わが身」なのであります。

『すなわち「照らされる者」として照らし出された私の姿、どうにもならぬ宿業のわが身であります。いよ〳〵「極重悪人唯稱仏」で、ただ念仏「称我名字」のホカないことであります』とあり。



無相師との御縁はその殆んどが、病床対談であり、それだけ小生にとっては、直観的対応にて、一会、一会が心満ち足りたものであった。

師曰く「ある篤信の同行あり。ある時その同行が妻に、ちっとも参らぬおまえも地獄行き、日々参るわしも地獄行きと云った。妻曰く、参らぬわたしも同じ地獄行きならなぜその様に毎日参らんすぞ。同行曰く、それでも御恩思えば参らずに居られぬものと。参るお前も地獄行き、参らぬ私も地獄行きと云うことが如何にもわからん。お寺へ参ってお念仏申すとか、御信心を頂いたら参らん自分になったように思う。それでは一種深信、法の深信だけ。機の深信とは徹底して最後の最後まで、私が私である以上は、未来永劫、百年生きようが、千年万年生きようとツユチリ程も仏法気がないと云う、地獄一定のすみかと云うことは変らん。そうでなかったら二種深信でない、一種深信、御信心頂いたら法の深信だけになる。こう云う御縁が多い。殆んどそれである。御信心頂いたら、助からんこのままのお助けと云う風にしても、すぐお助け〳〵をもって来て、助からんこのままと云うことはなか〳〵本当に身に感ぜられない。だからすぐ助からんこのままのお助けと、お助けを必ずもってきてフタをしないと気がすまぬ。ソコが非常にデリケートなところで一番大切なところであると思う。

宗祖八十六才にして自然法爾章を書かれても、けっこうなことを初めから然らしむる〳〵と書いてあっても、一番最後には「是非知らず、邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師を好むなり」と頂いておられる。最後の最後まで聖人は機というものがいかに駄目なものかはずして居られない。ところが、自然法爾章の従来の講義をみても、自然法爾ということについての聖人の御領解のありがたい所だけを云うている。

よしあしの文字をも知らぬひとはみな
まことのこころなりけるを
善悪の字しりかほに、おほそらことのかたちなり
是非しらず、邪正もわかぬこの身なり
小慈小悲もなけれども　名利に人師このむなり

自分をオオソラゴトと感ずる廻向の信心によりて照らされた凡夫の自性、何処までも聖人ははずして居られないという処が、聖人のありがたいところである。

それについて思いおこすことは、庄松のナントモナイと云う言葉である。庄松が招かれて正信偈をとなえて後に、ナントモナイ、〳〵と云ってカネをならした話。

又興正寺の御法主に、信心を頂いたこころは？と問われ、信心の得られごころは、ナントモナイと答えた話。ナントモナイとはこの機のことであった。私はこの機の徹底して

ナントモナイと云うことが、二十年もわからなんだと、それであってこそ一席の御縁にあえるのも自分の力ではない。一声の念仏も、アクビ念仏にしても自分の力ではない、自分というものはどうにもならんなあということも、自分の力ではないということが頂ける。仏法的なことと内観的なことは一切ナントモナイのがこいつの自性で、そのものが御縁にあい、そのものが念仏申し、そのものが段々喜こばして貰うこともあると云うことは、すべてが如来の廻向の外ない。自分にはない、たまにその心がおこるのは、御廻向の仏智、信心のオカゲであり、コレにはない。ちっとも仏法的なものがない。そこがわからんから。ただ一席の御縁、アクビ念仏を申せることがありがたいと云うことがわからん、頂けない。なんにもないのだ、手ぶら八貫落ちてゆくまま、落ちてゆくだけ、そうすると御縁に会わぬものと合うたもののちがいは何処か、機には一寸もちがいはない、機が変るように思うたら大ちがい、ちっともかわらん、ナントモナイと云うこと、地獄は一定ということ、仏法気のないことは一寸もかわらん。何処が変ったか、唯お念仏が頂けるか、お念仏が頂けんかの違いである、それだけ、機においてはナントモナイ奴だとこれがはっきりせねば、一生どころか万生生きてもこれが自分の力では出られないということ、その点をはっきりして貰いたいと思うことである。参れるか参れんかそんなことはわからん、唯仰せ一つ、念仏じゃ信心じゃ云うても仰せ一つ、念仏申せという仰せ一つ、ナンマンダブナンマンダブ。ありがたかったの御述懐。香樹院師曰く。聞いたことを常に思うが、如来のお乳をのんでいること故赤子が親の乳で育つが如くじゃと、ただ〳〵聞思させて頂く毎日であります。

。――――――。――――――。

**ひとにまなぶ**　　榎本　榮一（二十頁より）

ひとにふれていると
自分の未熟
なんとなくわかり
内心　なるほど
なるほど

**夜　空**

あの銀河より
もっと荘厳な如来の河が
無始より
われら衆生界を流れつづけ



## 随感いろ〳〵

花田正夫

病める身も弥陀の誓に生かされて
　生死の海に夕陽かがやく

これは山口の誌友が癌の末期に、お別れとお礼のこころのこもった遺詠で、私の心に深く刻まれたものである。良寛さんの歌に

不可思議の弥陀の誓のなかりせば
　何をこの世の思ひ出とせん

とあるのも思い併せる。いよ〳〵死を前にすれば、独生独死、独去独来の一人旅であるが、そこに弥陀大悲のみ声がひびいて、この世の日の暮れに浄土への夜明けを迎えさせて頂けるのである。

私が医大の三回生の時、学友のS君が急病で死を前にして「僕は医師になって病人の力になろうと願っていたのに、こんなに早く駄目になろうとは！」と長嘆息した。無明の大夜を照らす灯炬なくば如何にせんである。

**お念仏の紙**

七里和上の語録に「陶器を重ねて箱にしまう時、間に紙をはさむと傷がつかない。人と人との交わりも、お念仏の紙が大切である。」とあった。飽くことのない利己の角で互に傷つきあう身に、仏の大悲の御手、お念仏が入って下さる時、種々の問題を持ったままに、永遠に続く友誼を恵まれるのである。

**この世は夢**

この世が夢と知らされる時、浄土のすがたが厳然と現われてくる。この世を確かだと思っている間は、お浄土が夢としか思えない。

信友の治田さんが胃癌で臨終に、お別れに見舞った我々に「みんな夢です！」と一人一人を見つめながらつぶやかれて、顔には清らかな微笑をたたえていられた。そこに浄土の光が輝いていた。

**無底の大悲に照護せられて**

私共は是非善悪の距ての壁で心に底を持っている。ところが、老少善悪の人を選ばれぬ仏の本願と聞いて仰天したが、そんな広大な仏心は信じられなかった。所謂親心子知らずであるが、その子を捨てる親はなく、慈愛をかけて下さるように、無信の私に仏の大悲は倦むことなく注がれて、点滴が岩をも穿うように、遂に疑えない身にして下さる。

その無底の大悲のたのもしさに、自分の愚悪さをそのまま慚愧させていただけるのである。そして、あれも出来ぬこれもついて行けぬと行き詰っていたあらゆる聖賢の教は、夫々に私を写して下さる尊い鏡であったと気付かされ、改めてその御恩を謝しはじめた。

# あとがき

近角先生の懺悔録の最初の悪人救済の本旨をお述べ下さったものを転載させていただきました。ことに歎異抄を拝読する上に大切な要点を御自身の体験からお話し下さったものであります。

池山先生の「ただ念仏してのたのもしさ」、は、仏と人の中から頂きました。先生の御晩年の公開講話の最後のものであります。「ただ念仏して」とお勧め下さる如来聖人の思召をこの一句に深く体解されて、われひと共にこの道一つを辿るようにとのお願いのこもったものであります。

福島先生は「外賢内愚」と仰言った聖人のお言葉に御自身を見出されてのお歓びの一文であります。私自身は、孔子の「知らざるを知らずとなす、真に知れるなり」とか、ソクラテスの「我は何事も知らざることを知れり」とか、聖書の「心の貧しき者は幸なり」等々を読んで、私はそうなれない、空っぽの稲の穂はいつまでも頭を上げている身であると知らされ、聖人のこれを言い当てて下さることに随喜しはじめたのである。

西元先生の「医学と生死を結ぶもの」の一文は、最近の緊急事でありますことを知らされました。医学関係の方で篤い信念を持たれる人々が、このことを深くお考えであり、医学生だった私には自身の問題として考えさせられている。

但し我々の持ち合せの親切心は未通らないで行き詰るから、患者を看護する人達がこうした縁によって、行き詰りのない仏の大慈悲心を身にいただくことが何よりも大切であると省みさせられることである。

岩崎成章師から、「無相さんの御述懐」をいただく。一期一念をよろこび、聞きとられて耳の底にのこるものをお誌し下さいました。凡夫は信のあるなしによってチットも変らない素地、たすかり得ない者の救いを明らかに伝えて下さいました。

井上先生の原稿は都合で来月に廻させていただきます。先生は益々お元気で、朝日文化センターで御講話をいただく由、鳥越さんからお知らせ下さいました。

**おことわり**

八月は例年のように例会を休ませていただきます。七月は身体さえよろしければ開かせて頂きますが、不明であります。


**定価** 半年 八〇〇円（送共）
一年 一六〇〇円（送共）

**編集・発行人** 花田正夫
名古屋市南区駈上二丁目十四―二十九
電話 八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

**印刷人** 坂部光雄
名古屋市南区駈上二丁目十四―二十九

**発行所** 慈光社
振替口座 名古屋 六―一〇四七〇番
郵便番号 四五七

慈光 第三十六巻第七号 昭和五十九年七月十五日発行 （毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可